

第四幕 これまでとこれから

継承の現場を通して見えてくるもの。民俗芸能の行く末を選択するのは、地域の住民自身であること。必要と思わなければ消えてしまう。民俗学の専門家である木村先生に民俗芸能のこれまでとこれからを伺った。



市文化財保護審議会 委員
木村 康夫 氏 民俗学専門
大田原市なす風土記の丘湯津上資料館・大田原市歴史民俗資料館 館長

時代を呼吸してきた民俗芸能

民俗芸能は時代の流行やノリのよなものから生まれ、広がり、各土地の風土によって磨かれてきました。「村のために何か面白いこと始めるか」。そんな軽いきっかけから始まったものも多くあったのではないのでしょうか。長く伝承されているものでも、型を維持しているものは珍しく、アレンジなども加えられることで、独自の文化として定着したのです。それを「風流」と言います。その証拠に、那須地域に伝承される獅子舞を見ても一つとして同じものはありません。

長い年月をかけて文化へ

現代の「一発芸人」と呼ばれる人の芸風は、爆発的に流行る一方、飽きられるのも早いのです。今の流行は凄まじいスピード

楽しむために華やかに彩られる

成り立ちこそ華やかさのない神事でしたが、そこに見世物としての要素が加わることで、色鮮やかに彩られていきました。華やかな夏の風物詩で有名な京都の祇園祭も、室町時代後期に一気に華やかになったと言われています。

民俗芸能を地域内で実施・継承していくには、時間も手間もかかるので「せつかくの祭りならみんなで楽しく」という考えが働くのは当然のこと。また、昔の生活は

生きるために捧げられた祈り

現代のように多様ではなく、娯楽も充実していなかったからこそ、祭りなどの祭礼が人々の心のより所となっていました。

食に関しても、庶民は自給自足が当たり前でしたから、作物の収穫量が生活に大きな影響を与えました。だからこそ五穀豊穡を祈ってきたわけです。そうした不安定で厳しい生活の中、共同作業で役割を決め、一つのことに取り組み。その過程が地域の結束を強め、娯楽であっても、生活の糧として身近なところに存在したと言えます。

民俗芸能のこれから

日々のくらしに密接に関わってきたものなので、価値感の変容と



皆さんの心に残る芸能は必ず続いていきます。
演じる誇り、人同士のつながり、こそが紡ぎに最も必要なこと



ともに変化を迫られることは仕方ないこと。しかし、大切なのは「なぜその文化が必要だったのか」「なぜ先人たちが伝承してきたのか」という民俗芸能が持つ意義や意味を私たちが知ることだと思っています。民俗芸能を今後どうしていくかは、最終的に継承する方々が選択することだからです。もちろん、民俗芸能は、生活の営みや信仰のあり方などの文化を理解する上で、非常に大切なものであることに変わりはありません。ただ、伝承を強制してもおそらく長くは続きませんよ。私は、継承の過程で生まれる演じることへの誇りや、人同士のつながりこそが価値があると思います。だから民俗芸能が途絶えたとしても、時代の風流と人同士のつながりによって形を変え、いずれまた復活するでしょう。民俗芸能の本質は、伝統と創造を重ね時代と呼吸してきた文化なのです。

これまで紡がれてきたもの
新しく紡がれていくもの
あなたの心に残る芸能はありますか？